

OPINION

JJP に掲載された論文はどの程度引用されているか

JJP編集委員長 菅 弘 之

日本生理学会の英文機関誌である Japanese Journal of Physiology (JJP) 50巻1号の巻頭言でも述べたように、JJP は今年西暦2000年で丁度創刊50周年を迎えた。3年間の編集委員とそれに引き続く3年間の委員長の経験から顧みて、先人の大変なご努力によってここ迄来たのだらうと感無量である。

有り難いことに JJP のインパクトファクター(1998年調べ)も1.3にまで増加してきており、日本生理学会員のみならず、内外の生理学関係研究者の関心も増加しつつあるように感じられる。また、JJP 掲載論文全体の被引用頻度の半減期をあらわす Cited half-life も10年近くと比較的長い。これら両インデックスは JJP 全体を特徴付けるものであって、毎年更新される ISI 社の Journal Citation Report の CD 版で容易に調べられる。しかし両インデックスに具体的にどの論文が多く貢献しているかの調査は、予算と手段の制約ゆえに調べたことがなかった。

そこでこの機会に、JJP 掲載論文の内どれが最も頻回にその後の論文に引用されているかを ISI Japan 社のご厚意で調査してみた(謝辞参照)。その結果を被引用回数90回以上の論文に限って降順に示すと以下の通りであった。最初の括弧内の数字が掲

載後1999年秋迄の被引用回数である。最高が161回である。現時点(2000年2月)では、もう少々被引用回数が増して、若干順位が変わっているかも知れない。

著者名を眺めると、すでに退職された先人から目下活躍中の現役迄幅が広い。また、最も古いのは第5巻、1995年(従って掲載後45年が経過)、最も新しいのは第34巻、1984年(従って掲載後16年が経過)であり、これも幅広い。被引用回数順位と巻、掲載年とは必ずしも相関が無い(相関係数0.18)。このことは、内容さえ良ければ新しい論文でも被引用回数が短期間に増加することを意味しており、既掲載論文の被引用回数の増加を大いに期待したい。また今後長期に渡って引用され続ける様な立派な内容の論文が投稿されてくるのを期待したい。

現在では、さらに調べようと思えば、ISI 社の最新のデータベース検索ソフトである Web of Science(国内数大学では納入済み)を用いて、それぞれを引用している論文や、自己引用の割合なども調べられるが、私の手許からは未だアクセス出来ないのと、有料で依頼するには予算が必要となるのでして